

ああ「ディア・リブレ」

「パナマアメリカ」(2008年2月3日付け)に掲載された2回目の寄稿です。メキシコの大学生のキャンパスライフと比べるとどんな感じでしょうか？

国立パナマ大学の新聞学科に聴講生として通う機会があった。週1回、火曜日の朝8時から2時間ほど。仕事でやむをえず欠席することもしばしば。したがって行かれる日はできるだけ早めキャンパスに着くようにしていた。

ところが——。なんということか！入った教室に誰もいないケースにたびたびぶつかった。そこで近くにたむろしている仲間の学生に聞いた。だした。

「先生が来ていないから、たぶん、きょうの授業はないんじゃない？」つまり「休講」である。こんなときほどガクッと力が抜けるときはない。8時とはいえ、南国の太陽はすでにキラキラと照りつけている。急に歩みを止めたはずみで、どっと噴出してくる汗を拭きながら、ヤレヤレとの思いである。

日本での私の大学(早稲田)時代にもやはり休講はあった。予習が十分にできていないときなどは、正直言って「ああ助かった」と友人と近くの喫茶店へしげこんだものである。ふつうは前のクラスるとき教授から直接予告されるか、掲示板に休講の案内が出たものだった。

ところが、パナマでは日本と比べて休講が多い。しかもそれが教室に入って初めてわかる。

6月×日。いつものように車に大学の駐車場にとめると急ぎ足で教室に駆け込んだ。と、だれもいない。どの部屋もガランとしている。キャンパスの芝生ではボリュームを上げたディスコのまわりで学生たちが歓談している。「休講」という話は事前にはまったく耳にしていない。そこで、数冊の本とノートを小脇に、ガムをかみながら仲間とおしゃべり中の女子学生に声をかけた。

「アレ、あなた知らなかったの？きょうはディア・リブレよ。きのう選ばれたレイナが宣言したのよ」

昨日の新入生歓迎のフィエスタでミス文学部コンテストが行われた。そこで選ばれたミス、つまりレイナこと女王が「ディア・リブレ」を宣言したから、というのである。「ああ、なんてことだ。たかが一女学生、レイナの一声で学部全体の授業がなくなるなんて」——などと、まじめ一辺倒に考え、時間の浪費を嘆く自分などは、まだまだラテン・アメリカ気質になりきっていない証拠なのだ。教授たちさえもそれを大事な伝統行事として認めているのだ。

昨年の末、再びキャンパスを訪ね大学生活を思い出した。学生たちの生き方は当時とほとんど変わってはいない。長い人生だ。何をあくせくする必要があろうか。大学生活だって同じこと。人生は楽しむためにある。まして今の若い間は——この論理を身に付けられない限り、大きなギャップと浪費感にさいなまれるかもしれない。

さて、パナマ大学のよいところは、門戸が全市民に開放されていることである。高卒のほかビジネスマン、タクシー運転手、主婦と希望者は誰でも入ることができる。競争率××倍といった厳しい入学試験はない。したがって、ここでは「受験勉強」とか「入試対策」あるいは「浪人」などという言葉とは全く縁がないのである。ただし、これが「卒業」となる状況が違ってくる。試験なしで入学したものの、能力不足や環境の変化等の事情で卒業できないケースもある。年齢構成は18歳から50代まで。私を含めて教授より年上の生徒もいた。

キャンパス内には「光に向かって」とのタイトルが刻まれた盲人の像がある。目に見えぬなかで手探りで英知を求めゆく学徒の姿勢を示唆しているのであろう。ここから知性の光があふれ、世界の平和に貢献しゆく市民が陸続と育ってほしいと願わずにはいられない。



「パナマアメリカ」の掲載紙面